

### 野津静一郎氏が遺した史料と『松江市史』

私は現在、松江歴史館に寄託予定の野津家文書の点検をしています。「点検」と書いたのは、野津家文書は、野津静一郎氏所蔵分を島根県立図書館が、野津隆氏所蔵分を史料編纂課が調査目録を録っており、今はその目録と実物との照合作業をしているためです。



野津家文書全体（右側棚二段・左側棚上段）

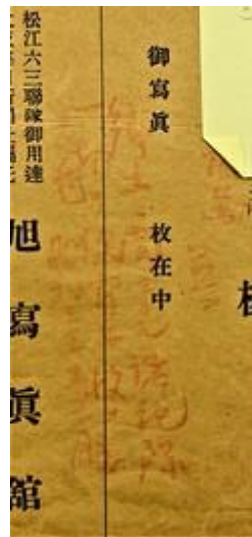
ここで少し、野津静一郎・隆父子について説明します。

野津静一郎は明治6年（1873）に雑賀町に生まれました。師範学校・中学校・高等女学校の歴史科の教員免許状を取得し、明治38年（1905）に教諭となります。同じ職場で親交のあった上野富太郎（後に共に『松江市誌』を編纂）が歴史科の免許状を持っていたため、地理科の免許状を取得し、

以後地理を主に教えていました。昭和6年（1931）に松江中学を退職した後、松江市長石倉俊寛のもとで企画された『松江市誌』の編纂を委嘱され、上野と共にこの事業に取り組みました（『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社、1997）。隆氏の詳しい経歴はわかりませんが、『雑賀の今昔』編纂に関わるなど、郷土歴史家として長年活動されていました。

野津家文書には、江戸期の古文書・静一郎氏が筆写した文書・『松江市誌』の原稿・隆氏が収集した古文書のコピー・写真などが保存されています。ここにしか遺されていない貴重な古文書や、所在が分からなくなってしまった古文書の筆写などがあるため、同家からお借りしていました。

先日、作業が中盤に差し掛かったころ、一つの封筒が目にとまりました。「松江六三聯隊御用達大阪毎日新聞社囑託旭写真館」と印字されたその茶封筒には、赤鉛筆で「松江市誌ノ附図並ニ郷土ニ関スル諸記録一切ヲ便宜上収メ置モノ也ノ昭和三十一年二月」と書かれていました。筆跡と、すぐそばに同様の文章が書かれた新しい付箋メモが貼ってあることから、付箋は隆氏が、朱書は静一郎氏が書いたものだと思います。中には、昭和48年（1973）に発行された『松江市誌』復刻版の附図が7点入っていました。どうやら後に中身が入れ替えられたようです。そのため、封筒の表に書かれた言葉が何を指すのかが分かりにくいのですが、それでも私にはとても意味のある言葉のような気がしました。昭和31年（1956）というと、『松江市誌』発行から15年も経っています。何故この時期に書いたのでしょうか。



（左）野津静一郎氏の手書きのメモが書かれた封筒、（右）朱書部分を拡大したところ、野津敏夫家蔵

この2年後の昭和33年（1958）1月に松江市誌編纂会議が開かれ、静一郎氏も「松江市誌編纂委員会顧問」として出席しています。これは推測に過ぎませんが、もしかしたら内々で新しく松江市誌が編纂されると聞き、『松江市誌』編纂時の諸史料を整理していたのかもしれませんが。静一郎氏は『新修松江市誌』編纂途中の昭和35年（1960）9月2日に亡くなります。しかし、静一郎氏が遺した史料は、『新修松江市誌』、隆氏の雑賀町等の歴史研究、そして平成21年から始まった『松江市史』編纂で使われることになるのです。

『松江市史』では、他に上野富太郎、『八束郡誌』を編纂した奥原福市、『島根県史』を編纂した野津左馬之助の遺した史料を使用しています。こうした先人たちが遺した史料があるからこそ、たとえ原本が失われたとしても、私たちは過去の松江の姿を浮かび上がらせることができるのです。

現在においても、『松江市史』で収集した「郷土二関スル諸記録一切（いっさい）」をどう遺していくかが課題となっています。

（松江市史料調査課歴史史料専門調査員／高橋真千子／令和2年8月27日記、9月1日一部修正）